

角川小説新書

きいろい地球

昭和三十六年六月五日 初版発行

定価 百七拾円

著者

芹沢光治良

発行者

角川源義

印刷者

守安 巖

東京都千代田区神田三崎町一ノ一

発行所

株式会社 角川書店

東京都千代田

振替口座
東京都千代田

(落丁・乱丁本)

Printed in Japan

東京印刷・田中製本

きいろい地球

芹沢光治良



角川小説新書

第一章

パリへ行く話

「おスギ、待って——」

ふり向くと、同級生というより、グループ（仲間）の立川すみ子が、かけて来る。杉洋子は電柱の横にたたずんで待った。

おスギ、タツチンと、おたがいに渾名^{あだな}で呼びあう仲だが、途上で、大きな声で、しかも渾名で呼びとめるとは、不謹慎^{ふきんしん}なタツチンだ。

国電の飯田橋駅^{いいたばし}から、通信病院^{ていしん}へ行く朝の道は、いつも女学生がいっぱいだ。靖国神社^{やすくに}の岡から市^{いち}が谷^やにかけて、女子の学校が多いからだ、学校で制服がちがうばかりでなく、歩き方までおのおの特色があるから、一目で洋子やすみ子が、坂上の有名なミッションスクールの生徒だと

わかる。ただ、とりすました上品な学校で、ふだんおしとやかなことを誇りにしている学校の最上級の生徒が、たしなみを忘れてかけて来るのは、なにか大きな事件があるからにちがいない。

「おスギ、けさの新聞で見たわ。おめでとう」

すみ子は息をはずませた。しかし、洋子は答えようがなくて、歩調をあわせて歩きだした。

「パリに行くんでしょう？　ご出発はいつ？」

「パリへ行くって……なんのこと？」

「だって、おとう様が、ユネスコのお役に任命されて、パリに行くって、新聞に出てるじゃないの」

「そんなことが新聞に出てた？」

洋子は目をまるくした。

「へえ、おスギ新聞見なかったの。パパの写真まで出て、数年間パリにご滞在だってことまで、書いてあったわ。数年もご滞在ならば、家族もごいっしょでしょ？　うらやましいなあ」

「そう？　あたしは知らない。父からきいていないもの——」

洋子とはっさにいつわった。パリに行くかもしれないと、タッチンにうちあけたら、それこそ、グループだけでなく、すぐにクラスじゅうにひろまって、羨望せんぼうされるにきまっている。うるさいことだ。それに、まだパリに行くとはきまっていない。新聞も見えない。あくまでわかんない、

知らない、答えているにかぎると、洋子は考えた――

実は、その前夜、父がおそく帰って来るなり、茶の間で、

「おい、みんな集まらんか、誠一はいるか、洋子、春次――」

と、大きな声で呼んだ。酒がはいっているらしく機嫌のいい声だった。こんな声のときは、きまって鮎かなにか食べものを土産にもって帰る父だ。

洋子は父の声より先に、茶の間に行ったが、東大の法科三年生の兄も、高校にはいったばかりの弟も、みしみし階段に音をたてて、二階から降りて来た。父は洋服もかえないで、長火鉢の前にあぐらをかいたまま、ショートケーキをひらいて、紅茶をいれさせながら、

「大ニュースなんだがなあ。おかあさんもすわってきいてください。みんなに相談しなければならぬことがありますから」

と言って、パリのユネスコ本部に赴任することになりそうだと、はじめて話した。

父の杉博士は原子物理の学者で、ユネスコ本部につとめるという名目で、日本のパリ大使館につとめるので、気はらくだが、家族をパリにつれて行くべきか迷っていた。その点が、みんなに相談のあるということだった。夫人さえ生きていれば、簡単な問題であるが、三年前に夫人をなくして、その後、再婚しないで、母堂が家庭をみていた。

「おかあさんにパリへ行ってもらうのはむりだから、このまま家をまもっていただけますね。」

ただ子どもたちはどうするかな。将来のことを考えて、自分で判断してきめてもらいたいのだが……パリに行ったほうがいい者は、おとうさんがつれて行く。東京にいたほうがいい者は、この家におつて、おばあ様の監督に服するとともに、勉強してもらいたいのだがね」

子どもたちには、いつも友だちのように話す父だ。二年前にも、同じようなパリ行き話がちよつと出て、お流れになったので、博士がそう突然話し出したからとて、かくべつ誰だれも驚きはしない。

「誠一はどうだ」

「僕ぼくですか、大学がもう二年ありますから、東京にのこつたほうがいいですが……おばあ様が、この家にいれば、僕責任をもつて、おばあ様と協力して留守るすをまもりますよ。でも、おばあ様が、パリにいらしたほうが、よろしければ、僕はどこへでも下宿げしゆくして、立派りっぱにやります」

東大三年生らしくきばつた発言だが、すぐ祖母が反対した。

「もう十五年若ければ、喜んで行きますが、わたしは銃後のまもりになわりますわい。年とつて、おとうさんの足手まといになるばかりですからね」

「洋子はどうか」

「あたし？ パリへは行きたいわよ。誰だつて行きたいもの。ただ、高校だけは出ておきたい。ような気もするけれど……」

「高校なんか未練をもつことないさ、女の子は……断然パリに行けよ。東京にのこられたら、僕の責任が重くなるばかりだぞ」

「誠一、言葉をはさむな。本人の希望を十分ききたいんだからね。洋子は言いたいことがまだあるだろう？」

「高校はまだ一年あるし……高校を出ると、来年のいまごろパリへ行くことになるけれど……あたしがいま行ったほうがいいか、来年のほうがいいか、あたしの問題よりもおとう様の問題じゃないかしら……」

「どういう意味だい、おかしい論理だぞ」

「あたしが行くのと行かないので、おとう様のパリのくらし方がちがうでしょ？ ホテル住まいするとか、家をお借りになるとか……もちろんあたしが行けば、小さい主婦代理をしますけれど」

「よし、春次はどうだ」

「僕はせっかく高校に入学したばかりですから、おもしろいような気もして、迷うですね。このまま日本で高校生活をつづけて、大学へ進学したほうがいいか……それとも、パリへ行って、向こうで学生生活をはじめて、向こうの大学を出たほうがいいか、その二つですが、僕にはわかんないなあ。おとう様やにいさんなどのほうが、わかるのじゃありませんか」

「よろしい。おとうさんも考えておくが、お前たちもよく相談しておいてもらいたい。さあ今夜は、これくらいで、ケーキを食べるとしようか」

そう博士が笑うと、祖母ものどかに加えた。

「おとうさんはそんなこと言って、みんなをさわがせて、今度もうやむやになるのではありませんか」

「そんなことになるかな。正式に発令にならないことだからね。しかし今度はどうやらほんとうになりそうだ。だから土産をふんばつしたんだよ」

そう、博士はご機嫌だったが、翌日新聞に出るとは、家の人々は知らなかった。

高校一年生

春次は希望した高校に入学したばかりだ。東京でも有名校で、多くの中学生のあこがれの高校だ。ここから東大への進学率が高いからで、この高校に入学するために、彼は中学生時代に、ずいぶんむりな勉強をした。兄の誠一もこの高校から東大に進んだし、春次は兄に負けたくなかった。兄の歩いたあとをについて行きたくもあった。そして、兄はまた、家庭教師のようになって春次をたすけた。母のない家庭で、父が勉強にやかましく言わないから、兄弟がしぜんに協力する

ようにもなった。

そのおかげで、あこがれの高校に入学したばかりだ。

春次は高校生として、二週間も通学しないで、父博士がフランスに赴任することになり、父と行をとにするか、東京にとどまるか、自分で決定しろと言われて、ただ当惑した。

学校の先生に相談したくても、それほど親しくなっていない。同じ中学から同じ高校に進学した親友の石丸に話したところ、

「ママはどう言うの」

「ママか。ないんだよ、三年前になくなった」

「そうだったな。僕のママにきいてみるよ、ね。重大な問題で、とても僕一人では判断できないからね」

そう言って、石丸は翌日、校庭で母の意見を春次に話した。

「せっかくこの学校へ入学したんだから、僕だったら東京へとどめるって、言うんだよ。ここですでまじめに勉強していれば、希望の大学に進学できるし……日本では男の子の運命は、大学で決定するし、杉君も外国人になるのじゃないし、日本人として生きなければならぬから、東京にのこって、高校生活をつづけるべきだって……ママは言うんだ」

「石丸君もママと同じ意見？」

「うん。僕だって、パリに行ってみたいと思うよ。だけれど、パリには、大学を出てからだつて、行けるものな」

「僕もそう思うんだ。それに、僕の家にママがあつて、ママもいっしょにパリに行ってしまうなら、東京にのこつたら寂しいけれど、パパ一人行くだけだからな」

「じゃ、東京におれよ」

「うん、せっかく入学したんだものなあ」

そう春次は元氣に親友には答えたが、しかし、迷いがのこつた。フランスへ行つて、フランスの大学へ進むということはできないものだろうか。それについては、兄に聞くよりほかにない。兄の誠一は大学の先生やフランス大使館できいて来てくれた。

「フランス人として教育を受ければいいんだが、国家試験を二回受けなければならないそうぞ。だが、お前は中学を出ているから、二回目の国家試験だけ受ければ、大学へ進学できそうだがだ全部フランス語だからなあ。言葉で苦労するぞ。しかし、若いから言葉の困難も克服できるだろうから、ほんとうにその氣になれば、むずかしくはないだろう。これから、國際的に活躍するには、フランス人として教育を受けるのも、おもしろいと思うがなあ。フランス人として教育を受けても、もちろんお前は日本人さ。日本人として、将来大いに世界的に活躍できるかもしれないからなあ」

「おとうさんはどう言うだろうか」

「お前の決心次第だよ」

「にいさんならどうする？」

「意気地ないぞ、自分できめられないなんて」

「だけれど、決心のしようがないものね、経験のないことだしさ、判断する材料もないもの」

「お前はなにを勉強するつもりだ、それからきめろ」

「うん、できたら、理論物理をやりたいがね。おとうさんにはまだ話してないけれど……大学では理科を選ぶつもりだ」

「僕がお前だったらいままで自分できめたコースを進むなあ。そのコースが、目的の高校にはいったことで、ずっと安全だと保証されたようなものだろう？ 迷うことはないぞ」

「わかりました」

そうはつきり答えたが、春次はフランスへ行つて冒険してみたいような気もした。高校から目的の東大の理科に進むという道は、勉強すれば困難ではない。もうきまった安全な道のように思われる。だが、きまった安全な道を歩くのではなくて、わからないフランスで冒険をしたいと、少年らしい野心がもえた。しかし、そんなことを兄に話したらば、生意気だと言われるにきまつ

ている。それなら、姉の洋子にもうちあけたらと考えられるが、姉に話したら、家じゅうの笑い
のたねにされるので、結局、じつと胸のおくにかくした。父に話したいが、父は出発の準備に忙
しく出歩いて、顔をあわせる機会もなくなった。

ある夜、父博士はいつもより早く帰って、茶の間に家族を呼びあつめた。

春次はパリ行きの最後のうちあわせだろうと考えて、顔を輝かせて降りて行った。兄も姉も祖
母も、もちろん集まったが、父がいつもとちがって真剣な面持ちであつたから、しぜんにかたく
なつて、父の顔を見て、なにか重大なことだろうと心配した。父がパリに発つ前に、再婚したほ
うがよいのではなからうかと、祖母や兄が話していることを、春次は小耳にはさんでいたから、
父がその問題をもち出すのであらうかと、小さい胸に想像した。

博士もためらっているようにして、重々しく言った。

「これはみんなに秘密にしていようと思つていたが、やはり話したほうがいいと決心したので、
とくにおかあ様、ゆるしていただきますよ」

祖母はじめ、全部がはつとしたように、博士の顔を見つめて、息をのんだ。

「常次じようじのことですがね」

そう言つて、博士は息をついた。常次というのは戦争中にフランス領印度支那(今のヴェトナム)で戦死
した博士の弟である。おじさんのことかと、春次はわけもなくほつとしたが、兄も姉も同様に表

情をやわらげた。

「常次がサイゴンでフランスの女性といっしょになって、子どもがあつたんですよ。おかあ様には内証にしていたようですが……そのフランスの婦人というのは、サイゴンの高校で人文地理学の先生をしていた学者だったらしいですが、気の毒に、常次の死後、さんざん苦労したあげく、サイゴンで急病でなくなったそうです。遺児はフランス人の子だからといって、フランスへ帰る人々が、いっしょにつれて帰って、母親の両親へわたしたそうです。それで、私はパリへ行ったら、その子どもをさがして、事情によっては、引きうけて育ててやろうと思つていますが、おかあ様のおゆるしを得たいんです。そしたら、常次もうかばれると思ひますからねえ」

博士は一気にそう話してしまうと、肩の荷をおろしたようにタバコの火をつけたが、きいていた家族は、祖母をはじめ、みな吐息といきが出た。

「それで、あなたは、常次から子どもがあるってこと、ききましたか」
祖母は目をぱちぱちさせた。

「それらしい手紙をもらったことがあるんです。でも、おかあ様には内証にしてくれて、書いてきたものですから……たしかなことは、常次の戦友が帰還して、話してくれました」

「常次もばかな子だねえ。かくすこともないじゃないか……その子はわたしの孫じゃないかね。その上、常次のかたみだもの……そんなことがあつたのかい。よく話してくれました。その子の

居所がすぐわかるかね」

「それがわからないのです。子どもの名がガストンといって、日本人そっくりだということと、母親の名がルイズということ以外には、わからないですが、パリへ行つて、大使館でしらべさせれば、発見できると思います」

「そうかい、常次の子がパリにいるって、ほんとうに驚きましたよ。いくつぐらいだろうね」

「洋子とおつかつだろうと思いますよ。……常次の子をさがすことも、今度のお役目の一つだ」と思うと、パリに赴任するのに、新しく元氣が出ます」

「常次の子がパリにねえ。人間は長生きするものだねえ。フランス人の孫があつたなんて……おじいさんが生きてらしたら、どうおっしゃるか」

祖母はたのしそうに言うが、目はうるんでいた。洋子がすぐとんきょうな声をはさんだ。

「そのガストンさんって、あたしたちのいとこってわけね。フランス人のいところがあるなんて、あたしたちまるで国際小説の主人公みたいねえ」

「おじいさんはイギリスがごひいきで、お若いころイギリスでくらしことがあつたからでしょうが、子どもにジョージなんて、イギリス人の名をつけて……その常次がイギリスがきらいで、フランスが好きでさ、フランス語の勉強して、サイゴンの商社につとめたけれど……フランス人の子どもがあつたなんて、常次のほうがおじいさんよりうわてでしたね」

そう祖母は博士にほほえみかけたが、その表情の仄々^{はのぼの}していることは、祖母のよさで、こんなことから、年とっても祖母が若い孫たちから親しまれるのだ。

「僕、常次おじさんを知らなかったけれど、出征軍人じゃなかったのか」
そう春次も言葉をはさんだ。

さようなら

杉博士はガストンの話が一段落すると子どもたちにパリ行きの決心はどうかと、改めてきいた。
もう手続きをしなければならぬのだ。

「誠一はこの前の決心をかえないのか。やはりのこるんだな。それなら、あとで家のことをよく頼むことにして……春次はどうする」

「僕、にいさんとも話したけれど、せっかくA校に入学したから、東京にとどまったほうがいいと思います」

「おとう様。春次は将来理論物理を専攻したいと考えているようですが……僕は、理論物理を勉強するのに、東大がいいか、あるいは、アメリカの大学がいいか、またはフランスがいいか、わからないのです。専門がちがうから……だから、春次に適切な忠告ができなかったのですが、